

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 川端文学におけるフロイト思想の影響を巡る一考察

-自由連想から「不気味なもの」まで-

氏 名 MEBED Sharif Ramsey

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、川端康成（1899-1972）の文学作品の生成にオーストリアの精神分析医ジークムント・フロイト（1856-1939）の思想がどのように関わっていたかという問題について考察したものである。その影響はテーマ的なものだけではなく、文体にも影響が及んでいるということが本論文の重要な論点の一つである。フロイトは神経症の患者に「自由連想」の手法を使い、患者に楽な姿勢をとらせ、思い浮かぶことをそのまま医者に話すように指導していた。川端はその「自由連想」を使い、作品を書くべきであるとエッセイで主張した。そして多くの作品でフロイト的なテーマが取り扱われていることを巡って論考を展開させる。

この論文で取り上げられる作品はデビュー当時の小説から晩年の小説までのものである。まず第一章では、川端が大学を卒業した頃に発表したエッセイにおいては、心理学の関心が高かったことが指摘されている。そして川端の関心が、心理学から精神分析に移ったことを裏付けるため、川端が二十代に書いたエッセイが取り上げられている。また、川端は作品を書く際、フロイトの自由連想の技法を用い、登場人物の無意識にあることをそのまま表象しようとしていたことを論じる。そして川端がデビュー当時に書いた短編を二編取り上げ、その文体にフロイトの思想が及ぼした影響について分析し、考察する。

第二章では、短編「弱き器」（1929）について考察される。この作品は、主人公が見る夢を中心に展開する。その作品において、フロイトの精神分析用語が使用され、主人公自身が作品の中で見た夢の象徴的意味を分析している。また、この短編小説の他に、登場人物の夢が描かれる他の川端の作品に注目し、フロイトの『夢判断』（1900）に出てくる、夢に関する概念（特に圧縮と転移と忘却）を考察しながら、作品における夢の意味と役割について論じる。

第三章では、フロイトが文学作品や平生の生活の中に表出される《不気味》という観念を追究した論文「不気味なもの」（1919）に注目し、川端が1929年に発表した作品「死体紹介人」を分析する。

この作品の分析の中で特徴的に見られる「不気味」というテーマは、フロイトが用いた「不気味」と同じような意味として用いられていることを指摘している。川端の作品における不気味の意味を追求する。

第四章においては、「水晶幻想」(1930)と「針と霧と硝子」(1931)が取り上げられる。この二作品は、「新心理小説」と呼ばれているもので、アイルランド作家ジェイムズ・ジョイス(1882-1941)の影響が大きいと言われてきた短編である。本稿ではジョイスの影響としての「意識の流れ」だけではなく、フロイトの思想がジョイスより重要な役割を担っていること主張する。その影響を明らかにするため、作品を分析する。

第五章では『住吉』連作と呼ばれる作品群に注目し、これらの作品に夢の分析や、フロイトの提案した「投影」という精神分析の概念が顕著に現れることが述べられる。そしてエディプス・コンプレックスもこの作品の大きなモチーフとして登場することを指摘されている。本論文では、これらの精神分析的テーマが単に作品中に言葉として出現するだけではなく、作品の中心的駆動力ともなっていることも考察する。特に主人公が恋をする相手が母の代替物として描かれていることに注目し、作品の底流にフロイトの精神分析的思想が流れているということを論じている。

第六章では、『みづうみ』(1955)を取り上げ、この作品においてエディプス・コンプレックスが大きな役割を果たしていることを指摘する。そして、川端の作品に出てくる「魔界」という空間について考察し、彼の魔界というモチーフがフロイトの思想と深い関わりがあることについて論じている。そして、フロイトの思想を通して魔界のテーマを解釈し、魔界の要素を明らかにしている。川端の魔界については、すでに多くの研究者によって考察されてきたが、精神分析的な要素を指摘したものは、これまで現れていない。本論文では、川端の作品に出てくる魔界の住民は、普通の人間のように無意識の欲望を抑圧するのではなく、却って追究するという特徴があり、加えて、性的対象に痛みなどの被害を加えようとする特徴があることを分析している。この性格は、フロイトの『性理論三篇』で紹介される人間の無意識的性生活に由来するについて論じる。つまり川端の魔界はフロイトの無意識によって構成されていると論じる。また、『みづうみ』に出てくる死んだ赤ん坊の幻想の描写を取り上げ、その赤ん坊はフロイトのエッセイ「不気味なもの」に取り上げるドッペルゲンガーと共通点があり、『みづうみ』に現れるそれぞれのイメージとテーマがフロイトの「不気味なもの」に類似していることを指摘し、フロイトによる直截的な影響である可能性について考察している。

第七章では、川端の『眠れる美女』(1960)を取り上げ、その作品には多くの神話や民話の構造との類似性があることを指摘する。特に、神話に頻出する登場人物の類型が『眠れる美女』にも出現している。原型の神話構造が人間の無意識に存在するとフロイトが主張していたことについて論じ、『眠れる美女』にも現れることが、川端による無意識的な反復であると主張する。また『眠れる美女』に現れる夢の描写を分析し、川端が主人公の心に隠される人間の真実について、夢を通して描き出そうとしたことを論じる。

第八章では、川端の短編「片腕」(1963)を中心に考察する。この作品にはシュルレアリスムのモチーフが色濃く現れる。主人公はある女性の片腕を体からはずし、アパートまで持って帰り、一晚女性の片腕と過ごす。その中「不気味」という単語と不気味なテーマが多く現れる。その不気味さと去勢コンプレックスと関わり付けて問題を考察する。これは川端が意識的にフロイトの思想を作品に取り入れていたことを示している。また、それがフロイトの考案した《不気味》と共通点が

多いことを指摘し、これもフロイトの影響という可能性があるとする。フロイトからの影響の可能性を論じた上、精神分析の思想を念頭に置いて作品の解釈を行う。

最後に、結論でそれぞれの章で論じた要点をもう一度振り返って、川端の作品がデビュー当時の時期から晩年まで大きな影響を及ぼし、作品形成の際に重要であったことを強調する。